
空に歌えば

常煮一人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に歌えば

【Nコード】

N2112D

【作者名】

常煮一人

【あらすじ】

やる気も、努力も、根性も感じないヘラヘラな高校生四人組が、ある男とバンドに出会い、変わっていくストーリー。

第一話「いつもの日常」(前書き)

事情によりカツオから常煮一人に変わった僕が書く、バンドストーリー
【空に歌えば】をお願いします。

第一話「いつもの日常」

男はアコースティックギターを弾き、空を眺めていた。

俺は川原の土手に黄昏ているその男に声を掛けようと思ったが、彼が弾くその音色は、聞いた事がないのに何故かすーっと耳に入り、出て来ない。閉じ込められた感じた。頭の中で何度も繰り返される。俺は固まったままその男の演奏を聞いていた。

今日、そんな夢を見た。

「さみー」

冬だから当たり前だ。と思ってしまったが、あまりに寒すぎて、無意識に出てしまった愚痴。

「冬だから当たり前だろ」

俺と思った事を言ってくれた中原剛は、どこに忍び込ませておいたのだろうと疑う使い捨てカイロを両手で挟み、何回も擦っている。

「貸してくれ、中原様」

「やじゃ」なんてかわいらしい返事だろうか。

「いいじゃねえかよー！！こんな寒い日はストーブだけじゃもの足りないって」

俺がブツブツ屁理屈を言ったが、それはことごとく崩された。

「何がストーブだ。ここ、貯水タンクじゃねえか」

あつ、忘れてた。

我が校にある四つの貯水タンクのうち、一つを私、稲垣拓真いながきたくまとその友人、剛くんが占領していたのだった。

「なあ、剛。そろそろ秋冬用のサボリ場所見つけようぜ。さすがに貯水タンクは辛すぎる。なんか『下は冷水、上は猛吹雪、これなんだ？』みたいでさ、寒すぎるのなんのって…」

寒すぎる。さむすぎるのだ。

まるで氷の上で寝てる気分、私の辞書に「ぬくぬく」と「ぽか

ぽか」と「ほつかほか亭」はありません。て、まるでナポレオンみたいな名言が浮かんでしまう程寒いのだ。

寒さに提供してる方も、こんな場所に寝転がるなんて…と苛立ってきて、冷たい空気をガンガンと流してるはずだ！絶対。

「もー、我慢できねえ！頼むからカイロ貸せえ！」

俺は剛に覆い被さり、無理矢理にでもカイロを奪おうと企んだが、やはり小、中とバスケを経験した奴は違う。意地でもボールを離すもんかとコート上で誓ったかのように、カイロを離さない。

「お、おい、馬鹿…！先生に気付かれるだろ…。静まれ、静まれ…授業中だ」

時代劇の見過ぎだ、と突っ込んでしまうようなボケをかます程余裕があるとはム力つく。こうなりや…くすぐっちゃえ！

剛は何かを感じると、ギャハハハ！と大声で笑い始めた。

「ばっ、馬鹿あ！ギャハハハ、やめ…グハハハ、やつ…ハハハハ、無理…無理…死ぬ…ダハハハハ！」

右手はカイロ、左手は剛の脇腹付近をまさぐる。

剛は体をよじらせながら悶え笑う。だがカイロは離そうとしない。くそっ！いい加減諦めたまえ！

「よこしな…。さもなければ…。加速！」

「よせええええ！」

くすぐり攻撃が佳境を迎えた時だった。カイロが見事に半分に破れ、上半身と下半身に別れた。俺が掴んでいた上半身は、俺の手から離れ、中身とともに貯水タンクから転がり落ち、グラウンドに打ち付けられた。下半身は中身がなくなりもぬけの殻となり、剛の手の中で眠っている。とんでもない殺人事件が起こった。

「ばかあ！俺のぬくもりが…、俺のワイフがあ…」

剛のワイフになられてもカイロはどうすればいいかわかんないだろうな。なんて考える暇もなく、剛は俺の肩を何回もバシバシ叩いている。痛い。もう正直に謝るしかないようだ。

「正直すまなかった」

「すまなかつたじゃ警察はいらねえんだ。返せ！俺のぬくもりを返せ！」

カイ口を破られただけで警察呼ばれても困るのは警察だよな。

俺はもう少しで泣きそうな剛を見て「わかったよ」と言つて、そつと抱き締めた。だが、「気持ち悪い」と誰もが言いそうな返答をし、俺を押し退けた。ば、馬鹿！貯水タンク屋上にあるんだぞ！カイ口だけじゃなく俺も殺すのか！？

そうやって俺が慌てている時、授業中には珍しい、ピンポンパンポーンという誰かが呼び出される合図が鳴り響く。まず職員の呼び出しだろう。

『授業中なのに貯水タンクの上で馬鹿やってる二年三組の稲垣拓真と中原剛。今すぐ職員室に来なさい』

ピンポンパンポーン…。

俺らじゃん！？

誰が！？ここは屋上だろ！？職員室からじゃ見えないだろ！？俺は誰も答える奴がいらないのに次々と質問していた。

「何やってんだ！？逃げるぞ！？」

おお、そうだ。剛のもつともな意見に賛同し、俺らは貯水タンクを飛び降り、唯一の屋上と校舎を繋ぐ出入り口の戸に手をかけ、ガラガラと開ける。

この戸も、最初の方は南京錠が付いていたが、古臭いため、蹴ればすぐ取れる。だが、取れたのが先生にバレ、鍵をつけたが、その鍵がピアノを開けるような鍵。針金を曲げ、入れ、捻るとすぐ開く。頑張れよ鍵！

だが、戸を開けてすぐ足を踏み入れる踊り場に置いてある古びた椅子に、古典の授業中の古川がケータイ片手にニヤニヤ笑っている。チラッと見えたディスプレイには貯水タンクで馬鹿やっている俺らの模様が15秒に渡って流されている。

メールで添付しやがった！
女子高生が友達の彼氏の浮気を見つけた時にやる、内部告発と同じじゃねえか。

「だから真央ちゃんは三回転半ジャンプを出来るようになったんだよ…分かるか？」

わかりません。

結局逃げる訳にもいかず、俺らは古川の今風な手によって捕えられ、職員室という檻に放り込まれ、生徒指導の話を聞く事になりかれこれ二時間。長い。つまんない。もうすぐ昼休みだ。腹減った。でも職員室の中あったかい。

様々な思いを胸に秘めながら、生徒指導の話を聞く。長い。こいつに限らず先生という職人は、なんでこうも長い話が出るのだろう。別にすべらない話なら何時間でも聞ける。むしろ望む。だがつまんないんだ。しかも話の広げ方がおかしいんだ。俺らの努力の無さ 浅田真央の努力 パンダの人工増殖と広げている。

確かに俺らは努力が無い。浅田真央が三回転半ジャンプ出来たのはすごい。パンダを人工的に増殖？やろうと思ってもできねえよ。

だけど関係ねえじゃん！

そんなの関係ねえ！はい、オッパッピーじゃん！

小島よしおを崇拜するよ。よく俺の気持ちを的確に、なお面白く表現したもんだ。

俺の頭の中で小島よしおが舞っている途中で、昼休みを告げるチャイムが鳴った。「おー、昼休みかぁ」と生徒指導が小さく欠伸しながら言う。疲れたのか？なら短くしろ。

ついに生徒指導も腹が減ってる、という単純な理由で解放された。すると、不機嫌そうに俺らを待っていた藤原正則と山田悠哉が「来た来た」と小さく呟いた。

「よう、待たせたな」

「待たせたな、じゃねえよ。何回職員室に呼ばれたら気が済むんだよ？」

俺は詫びの気持ちを込めた気持ちで言ったのだが、正則に対しては機嫌は取れないようで愚痴をこぼし始めた。

生徒指導のあいつに言ってくれ。

「もういいじゃねえか。早くいかねえと学食の席無くなるぞ」

腹が減ってるようで山田が急かす。とりあえず俺も腹が減ったから四人で学食に向かった。

ここの学食は種類も豊富、味もなかなかイケると好評で常に行列、もみくちやになり、せっかく買った食券を無くす奴も跡が立たないけど、随分遅く来たようで、行列など無く、入れ違いで女子四人組が席を立ったからこれはチャンスだと確信し、サツと席に座る。

もう食券は渡したから、後は出来るのを待つだけ。だが、作り置きしておくから早く、数分も経たないうちに「カレー待ちの子ー」とおばさんの大声が食堂を埋め尽くす。

カレー、ラーメン、鮭定食、うどんがテーブルに並び、食べ始める。

「生徒指導の片岡めー、話長すぎだつてのー」

俺は辛めに見えるカレーを頬張りながら愚痴をこぼす。うん、やはり辛い。

「ちょ、馬鹿、飯粒が飛ぶつて！」

俺の向かいでラーメンをすすっていた藤原が、ひょいと器を持ち上げる。猫手じゃないのか、藤原……。いいな。

「あれ話聞いてたけどよー、なんか話ごっちゃになってなかった？」
悠哉が向かいにいる剛に賛同を求める。

片岡、他の先生よりも人一倍声がデカイからな。マイクがいらないから電池代が安くなるね。いいじゃねえか。片岡、あんた学校に必要な人物だよ。

「なつてたかも！なあ、拓真？」

話の内容を思い出した剛は、同じく説教を受けた俺に賛同を求める。そういえば、そうだったな。

「なんだっけ？浅田真央の愛犬、リンリンとか言ってたよな？」

「言ってたわ！」

「犬にリンリンはないよな」

「パンダもエアロなんて付けないし」

「荒川静香なんも関係ねえし」

「てか三回転半ジャンプに犬何にも力貸してねえっての」

「『真央はリンリンのおかげであのジャンプを成功したんだ！（片岡の真似）』」

「ダハハハハ！」

「真央って呼び捨てー」

「娘かよ！」

「あいつより真央ちゃんの方が偉いし」

「リンリンも滑ってたらしいよな」

「犬用あるん？」

「ねーよ！」

「ダハハハハ！」

俺らの爆笑を打ち消すかのように、あの地獄の音色が校内に響いた。

ピンポンパンポーン。

『二年三組の稲垣拓真、中原剛。二年四組の藤原正則、山田悠哉。職員室、片岡まで。ふふふ…』

何故だ！？

俺が焦っていると…肩に黒い小石みたいな塊がくっついている。

俺と剛の肩を見る…。うん、盗聴器だね。犯罪だよな…。

俺が盗聴器を確認していると、どこからか足音が聞こえ、気付き

たら食堂の出入り口を二人の職員が封鎖した。

こ、これは…片岡チルドレンだ！！

片岡チルドレン。片岡を尊敬し、片岡の使命を必ずやり遂げる者達。ある説によると、片岡に他人には言えない弱みを握られ、嫌々片岡の言っ事を聞いているそうだ。

片岡チルドレンに捕えられた俺達は、片岡の長話を聞かされる事に…。

今度は石油の高騰を中心に話が広がりました。

第一話「いつもの日常」(後書き)

次回、詐欺師に出会います。

第二話『かなりヤバめな男』

昨日の騒ぎのおかげで、俺達四人は晴れて自宅謹慎となりました。なんて処罰は、学校嫌いの俺らにとって、ただのごほーびにしか見えないうか。

自宅謹慎なんて届かぬ夢。反省文なんて言う、得なんか有り得ない。むしろシャーペンの芯と原稿用紙がもったいないだけの処罰を与えられた。

何故かわからないけどムカついて、原稿用紙と見つめ合うだけでも嫌な俺は、三人が「今日休む」と言っていたから一緒に休んだ。そして、何もやる事がないから川原の土手を四人で歩いている。

「なんかあのおじさんと顔を合わすだけで殺したくなるわ」

殺意が芽生えた剛に、「そうだなー」と同意をする。

あいつらは、なぜ教師という嫌われ者の象徴みたいな職を、自ら望んでつけたのだろうか。

ドラマの見過ぎなのかな。

次第に生徒と打ち解けて、卒業する時、一緒に泣する情景なのか。女子生徒と禁断の愛に走りたいためののか。わからないが、結局、あれはプロの物書きがこうしたら泣くか、ああしたら泣くかと錬りに錬って考えたシナリオ。

なったらなっただけ損をするんだ。結局、50分好きに話して、影で悪口叩かれて、定年退職するだけなんです。

ご愁傷様。

俺は「ふわああ」とでつかいあくびをしながら空を見てみると、俺に視界に白い煙が横切った。

山田がラッキーストライクを吸っていた。

「ちよ、君！？何隠し持つてるの！？僕にも吸わせてよー」

俺は土手で華麗に土下座をした。華麗に土下座もよくわからんが。
「わかったから落ち着けて！ほら…」
「すんません」

山田は箱から一本取り出すと、俺に渡した。有り難い。未成年は煙草を吸っちゃダメだよ。と注意をし、煙草に火をつけ、ふうーと煙を吐いた。

やっぱりこれだよ、ラッキーストライク。

外は異様に寒かった。

秋に綺麗な彩りを見せた紅葉も、枯れ果て、落ちてしまった。そのためか木もハゲたおっさんみたいに哀愁を漂わせている。その哀愁と強い風。そのおかげで俺たちの体は、ジュース瓶を丸ごと飲み込み、出したらキンキンに冷えるかのような冷たさになっている。

「それにしてもあれ、酷かったよな」

「ああ、ドリーム・ユー？」

「あれは笑えるよな！」

「なんでだよ！」

山田、俺、中原、藤原の順で言葉のキャッチボールをする。

そして、噂のドリーム・ユーとは、外に出る前の藤原宅で対面した。

「このバンドマジいいから聞いてみ？むしろ聞け！」と、結局は強制的に聞かせることにした藤原は、四段ラックの三段目から一枚のディスクを取り出し、コンポに入れた。「Roadin'g…」と画面に表示される。

「なんだよ、ドリーム・ユーって」

「俺らが中学の時に一世を風靡し、突然解散したバンドだよ」

四人中三人も知らないなら一世を風靡してないだろ。と思ったが、山田が「おっ、ロード終わった」と報告してくれたから、俺たちは

コンポのステレオに注目した。
ベース音で始まり、激しいロック調が続く。そして、歌い出しに入った。

じゃがいも星から
やってきた

あいつはついに
王様になった

ニンジン達に会いに行こう

だけど断然僕らは

レトルトカレー

ペペロンチーノが

世界を制する

ペペロンチーノが

世界を制する

これを三回繰り返した。

「ダセー！！！！！」

俺らは大爆笑した。藤原の褒め文句に対して、あの歌は失礼に過ぎない。じゃがいも、ニンジンに会ってるのに、結局は完成品に手を出すし、ペペロンチーノは何も関係ないし…。

俺たちは笑った。たくさん笑った。

藤原に殴られた。泣きながら殴られた。

それでいいじゃないか。

「いつてーな！！」よくないそうだ。

「俺の命をバカにしやがって！」

まるでガキのように泣きながら、ドリーム・ユーを称える。

「あれのどんな部分に惹かれてお前の命を捧げたんだ！」

「そうだ、藤原くん。命と僕らを殴った拳は大切に使わなきゃ」

「拳は逃げねえ！」

「ちょ、マジで辞める！」

藤原は今は帰宅部だが、その前は空手部で何度も大会に入賞するエースだったが、部員の誰かに怪我を負わせ、反省の意を込め、退部した。

だからこの拳は武器として扱うのだ。ドラクエなら無防備でスライムと戦えるはずだ。いや、あいつ弾力性あるから跳ね返すかも。

散々殴られても、ドリーム・ユ一の良さはまったく分からず、藤原は近所の事を考え、外でみっちり教えてくれるらしい。

ただストレスが溜まってるだけにしか見えないが。

そんなわけで外に来たが、藤原は「寒いからいいや」という独断で、『ドリーム・ユ一講座』は中止になり、川原の土手で散歩をする事になったのだ。

「なんか散歩するの久し振りだよな」

「なあ、いつもバイクだしな」

「たまにはバイクも休ませるか、たぶん乳酸が溜まってるな」
それは無いと思う。

俺らが遊ぶと言えば、ツーリングか誰かの家しかない。レパートの少なさは切なくなるが、こいつらといれば「一人じゃない」という気持ちになる。バイクだってそうだ。たとえ走ると止まるしか出来ないとしても乗ってくれる奴がいる。つまり「一人じゃない」という気持ちになるんだ。結局人もバイクもおなじ。

だからバイクだって乳酸が溜まる。休ませたっていいはずだ。

長い川原の土手中盤に差し掛かり、山田から貰った煙草ももう少してフィルターに侵入してしまう。まさに「ボス、突入します」状態だ。

俺は煙草を道に落とし、二、三回踏み付ける。

煙も出なくなり、煙草はご臨終となった。ふう、火事は防いだ。

「ラッキーストライクだ！」

どこからか若者の声が聞こえ、俺らは焦った。警察か。いや、でもなんかはしゃぎながら言っているように聞こえたぞ。

「ここだよ、ここ、白いバン」

丁寧に場所を教えてくれて、やっと、白いバンを見つけた。冷静になれば、どんな物でも見つけられる。そんな迷信をふと信じてしまふ。

白いバンは、トランクが開けられてある。中身はギターが入っているのだろう、ギターの形をしたケースが何箱も入っている。

バンのすぐ右隣りに、安物の折り畳みができるパイプ椅子を広げ、20代後半の男が座っていた。

「君らが吸っているの、ラッキーストライクでしょ？」

「あつ、はい」

男が笑顔で尋ね、山田がそれに答えた。

「うまいよねー、ラッキーストライク。一本頂戴」

いきなり話しかけて何を言うんだ、この男は。

「はい、どうぞ」

しかも渡したし。

男は煙草に火を付けると、10秒ぐらい吸い続けて、たくさん煙を吐く。「やつぱりこれだな」と幸せそうに話すと、また10秒ぐらい吸った。

なんだ一体？なんだかこっちも幸せになるぞ。

「…。てか君たち、高校生だろ」

なんだよ、この男！？

俺らは自慢でも無いんだが、私服になると大学生、または社会人に見えるとみんなに言われてた。パチンコ屋もすんなり入れた程だ。なのに、この男、一目で分かるなんて…。

「いや、違いますよお」

否定するが、男はニヤニヤしている。

「ダメだよー、高校生が煙草吸っちゃあ。はい、没収没収」

男は左手を差し出し、求める。

別にこの男は、高校生に見えた訳じゃない。

とりあえず尋ね、焦った所を付け込んで、煙草をこっそり貰うの
だろう。

うっかりハメられる所だった。

「うわー、なんかウザイよこの男。『煙草をください』っておもい
つきり顔に書いてるし。」

「…もういいよっ」

なんか拗ねてるよー！ねー！拗ねてるよ。

「そうすか」

空気が読めない俺たちは、煙草をその男にやることはなかった。

「空はすごいよなあ」

拗ねたのか、煙草欲しさに狂ったのか、変な事を言い出した。

「空は雨を恵み、地面を日で照らす。誰かだけにじゃない。みんな
にだ。空以上に人を公平に扱ってる奴なんかいいえ。俺は、空にな
りたい」

「そうですか…」

もう帰ってたかった。

「…と、そんな想いを歌に出来るこのアコギ！今なら五万だ！どう
だ！」

この男、詐欺師だ！しかもめちゃくちゃマヌケな詐欺師。

何故かって？

うん。

だって、このアコギ弦無いもん。

もう帰りたいかった。

「んー…超お得なのになんてかなー？」

詐欺師は頭をボリボリ掻きながら、バンのトランクを漁る。次は何を出してくるんだ？

「これでどうだ！子ウサギの死体を三体付けて…」

逃げるー！

こいつ、詐欺師よりヤバい男だぞー。

俺たちは逃げて、四手に別れた。俺はその後追って来ない事がわかって帰った。後は知らん。

第二話『かなりヤバめな男』（後書き）

評価お願いします。

第三話『汚点』

「だから…（早送り）」

今日も何かが気に入らなかったのか、長いだけの説教を受ける事になった。

何が気に入らないのだろう。

生徒指導の指には絆創膏が巻き付けてある。ガラスで切ったそう
だ。

その背景には割れたガラス窓。誰かが野球をやって割ったそう
だ。俺らの手にはグローブやバット。俺らが野球を職員室付近でや
っていた。

何が気に入らないのだろう。

「だから言ってるだろう！バームクーヘンは」

「管に何回も生地を塗るから層が出来るんですよ！？」よせ！や
めろ！山田。

生徒指導部長の話を防げると、大変な事になる。

「…いい度胸だな…山田」

職員室が微かに揺れ、職員の机のペン立てが倒れる。割れたガラ
スが振動により、ヒビが入った。

部長がキレたぞー！

キンコンカンコン。

校内にチャイムが響いた途端、生徒指導部長の怒りが収まった。

「あー、三時間目は数学だったな」

ラッキー！

片岡は数学教師だったんだ。興味すら持ってなかったから助かっ
たぜ。

「若林先生、私が戻ってくる間見ててくれ」

「わかりました」

若林先生が了承してくれたおかげで片岡は早めに職員室を出た。
なんてラッキーなんだろう。

真冬にストーブと暖房で包まれた省エネなんて言葉も知らない職員室に、一時間以上もいれて、さらに若林先生と話すなんてほば休み時間だ。

「ガラスを割るからバームクーヘンに話が変わるとは思わなかったな」

若林先生が呆れた顔で話す。

若林先生は新任と同時に生徒指導部に入ったが、指導しないため、唯一生徒の事を理解してる教師だ。年も近いから話しやすい。生徒の人気者だ。

「まさかガラスに見立てた飴で菓子だって作るのは大変って話になって、バームクーヘンですよ」

藤原がため息を吐く。

「大変だったよ。職員会議でハバネロの話になった時は…」

若林先生がその事を思い出し、藤原と同じようにため息を漏らす。

「それはお気の毒で」

剛が頭を下げる。

「お前なあ」若林先生は笑いながら剛の頭をペチンと叩く。

全ての教師たちよ、これが俺たちの望む教師像だ。

「そつえば、お前ら今週の土曜日暇？」

「はい、暇です」

「その日俺らのライブがあつてさ、そのライブにレコード会社の関係者も来るんだ。大切なライブだからよ、お前らに見て欲しくて」

「もちろん、絶対に行きます！」

「おう！じゃあゲストに入れておくからよ」

若林先生が本棚から一冊の書類を出し、何枚か紙をめくって、名簿に俺らの名前を書いた。ゲストは俺らだけらしい。

若林先生は教師として働いている最中、バンドも頑張っている。オロチクローズというバンドで、歌が俺ら向けに作られてるため聞きやすい。

「今何人買ったんですか」

「お前らを除いて50人ぐらいだな。先生には内緒な」

若林先生は人差し指を立てた。

一か月前、生徒にチケットをさばいている所を、不運なことに片岡の耳に入り、クビになるところだった。だから休み時間や昼休みにはそう容易く売れない。

「必ず行きますよ」

「頼むな」

そして土曜日になった。

最初は電車で行こうと考えたのだが、駅からライブハウスまで遠い事が判明し、バイクで行く事になった。

コンビ二に集合だが、俺が着いた頃にはみんな居て、おでんを肴に、酒を飲んでいた。俺が来るまで待つて欲しかった。

「お前が遅刻するなんていつもじゃん。前なんかダーツバーが閉店した後來たし」

藤原がいつの間にか買ってきたるめを噛みながら愚痴る。

「山手線五周したんだっけ？」

「八周だよ」

「ダッセー!!」

山田がバカ笑っている。

一週間前、新しくできた二十四時間営業のアミューズメントパークで朝まで遊び、そのまま学校に行って、早退して寝ようとしたが、同じクラスの中島がバイトしているダーツバーに行こうという事になり、一人山手線に乗ったが、寝過ごし、起きた時には出発駅を八

周していた。目的駅に着いた時には、ダーツバーは閉店していた。俺はそんなに夜に強くないって。

俺の痴態に笑いながらも、俺たちはエンジンを吹かし、ライブハウスへと向かった。

フルフェイスじゃないとこの冬にバイクは跨げない。

だが、俺らぐらいバイク好きになると、こんな風も衣服に思える。俺らは缶ジュースだ。

「なあ、若林先生デビューできるのかさ？」

「できるだろ」

「あんないい唄、世に出さなきゃもったいないって」

文学的でもないし、難解でもない。なのにこんないい歌詞を書け、さらにその歌詞にフィットしているサウンドは絶品だ。まさしく、オロチクロースはデビューしなきゃいけないんだ。

気がつけば、もうライブハウスは目の前だった。

「よし、ついた」

「早いなあ。まだ時間あるけどどうする？」

「うーん…」

俺が考えていると、「拓真！前！」という山田の呼び掛けに気づき、前を向いた途端、何かにぶつかった。

俺は慌てて、ブレーキをかける。猫だったらよかったが、猫はパーカーなんか着ないよな…。

「俺、人轢いちゃったよー！」

倒れている。「おい」と呼んでも応えない。冷や汗まで出て来

た。

「うわあ、ついにやつちやったよ、人殺し」

「なんで前見ないんだよ！」

「すまん、つい出来心」

「じゃあこれは故意か!？」

「違うって」

「どうしよつかあ、埋めよっかなあ」

「酔った剛は相手にするな」

「おい! 誰か来た!」

「やべ、逃げるぞ」

「お前は轢いたんだからいろ!」

「嫌だよ」

「捕まりたくないよ」

「逃げるぞ!」

俺たちは何回もエンジンを吹かし、逃げた。

後ろからは「待てよ!」と俺らを呼び止める罵声が響く。

夜の街の中で、罪を犯した四台のバイクが走り回っていた。

第四話『人殺し』（前書き）

次で物語がやっと始まります。

第四話『人殺し』

結局、俺が人を轢いたためライブハウスに行けるはずもなく、朝までダーツバーで遊んでいた。

ダーツバーのマスターは勘が鋭いのかわからないが、俺らの心情を察し、普段は夜の12時に閉めるのに朝まで営業していた。マスターの笑顔のおかげで少しだけ心が安らいだ気がした。

この日が金曜日だったため、土日は寝て食べるだけの生活をした。轢いてしまった奴がどうなったか考えると、吐き気が起こるからなるべく考えないようにして二日間を過ごした。

ただの二日酔いかもしれないと考える暇さえ無かった。

月曜日、ちゃんと先生に謝らなければならねえと思い、吐き気を堪え、なんとか教室まで来れた。

ん？騒がしい。

もう授業が始まってもいい時間帯なんだが…。

ガラガラと引き戸を開けると、何組かのグループで話してて、黒板には『集会後自習』と書かれていた。

「おう拓真。また遅刻かよ」

「どうだ、参ったか」

「何に参るんだよ？（笑）」

クラスメートの一人が話し掛け、俺がそれに応える。いつもの風景だ。

だが、なんか違うぞ。

いつもの会話の中に緊迫とした空気が流れてる。ここは異世界か？

「おう拓真。来たのか」

「よう剛」

剛もなんか緊迫とした空気が流れてる。異世界の住人なのか？

「ちよつと便所付き合ってくれねえか？」

「別にいいけど」

俺達はコソコソと教室を出た。

教室を出た途端、この階にトイレがあるのに、渡り廊下を通り、特別な用事でしか使わない校舎へと入り、そこにある男子トイレへと入った。

「どうしたんだよ。トイレなら教室の近くにあつたじゃねえか」

俺はダルそうに尋ねる。

「ここじゃなきゃダメなんだよ」剛は真剣なまなざしを俺に向けながら答える。

おい！まさか禁断の告白か！？

剛がジワジワと俺に近寄る。

俺は普通の青春がしたかったな…。

「若林先生が轢き逃げにあつたんだよ」

はあ、若林先生が轢き逃げね…！！！！

「どこで！？」

「声でけーよっ」

「どこですよ？」

注意されたから小声で訊く。

「金曜日にあのライブハウスの前で」

「マジかよ…！？」

おい…まさか、犯人はバイクに乗っていた。とかじゃ……。

「警察が調べたらよ、バイクだと思われるタイヤの跡があったんだと」

俺の心の中を読まれたかのように剛が答える。

「それってよ、まさかな……」

全身が寒気で覆われていく。足も震え出した。窓が開いているわけでもない。

「まだ決まったわけじゃねえって」

剛が必死にフオーする。

そんな剛も、唇が震えてるじゃねえか…。

「俺に決まってるじゃねえか！」

「だから声が」

「俺が先生を殺したんだ」

「落ち着けて」

「俺が先生を…」

「まだ死んだわけじゃねえって！」

動揺している俺の肩を掴み、剛が怒鳴る。

まだ死んだわけじゃない。

俺はその一言で希望が満ちた。また先生がチケットを俺らに売り裁く姿が目に見えた。

「だけど…」剛が話を続ける。

「歩けないんだと」

全ての雑音が聞こえなくなっていた。
トイレの換気扇の音も、微かに聞こえてたどこかのクラスのざわめきも、全て聞こえなくなった。

「教師も辞めるし、バンドも解散するってよ」

ただ剛の話す声が、耳の奥まで届いた。

気付いたら俺はショルダーバックを背負い、家路を歩いていた。
無意識の内に早退してしまったのだ。

ショックが大きかった。俺が若林先生の人生をグチャグチャに
てしまった。償おうとしても償えないくらい大きなものを、なくし
てしまった。

俺は一体、これからどう生きればいいのかだろう。

荒川は太陽光の反射でキラキラ輝き、太陽が光を放ち、視界に入
るとすごい眩しい。空は、綺麗だ。

「空はいいよなあ」

気付いたら詐欺師と同じような事を言っていた。何考えてるんだ

俺？子ウサギの死体なんて売りたくねえよ。

しかも、偶然にも前方に詐欺師らしき人物がいるし。

折り畳み式のパイプ椅子に座って、アコギを弾いている。何の曲を弾いているのかわからない。

気付かずに通り過ぎようとしたら、小声で何か歌っている。俺は気になり、そっと耳をすます。

ペペロンチーノが世界を制する。

ペペロンチーノが世界を制する。

この曲は…。

俺が歩むのを止めた途端、詐欺師はニヤリと笑い、「久し振りだな」と言った。

もしか俺、ハメられた！？

「はあ、久し振りです」俺は徐々に後ずさりしながら応える。

「逃げるなよ、今日は何も持って来てない」

確かに白いバンのトランクからは、開いてあるアコギのケースしかない。俺は安心した。

「どうしたんだよ、なんかあったか？」

詐欺師が核心をついた質問をする。

瞬時にさっき起きた事が蘇ってくる。

「俺はとんでもない事をしたかもしれない。いや、それは俺がしたのかもわからない。むしろ後者の方を期待している。そんなんだつたらまだ俺は反省してないのかな」

俺は遠巻きに話し始めると、詐欺師は数回頷き、白いバンを指差し「乗れ」と俺に言った。

何考えてんだ？こいつ。

だが、詐欺師は俺の考えを破壊するかのように、俺を助手席に引きずり込み、ドアを閉め、シートベルトを締め、エンジンを吹し、アクセルを踏み発進させる。それをビデオを早送りさせたような早さで行なった。

もう逃げられないと確信した俺は、シートベルトを締めようと後ろを振り返った。

「よう」

「おっ、よう」

剛に挨拶を済ませ、シートベルトを締める。

ん？

「なんでここにいるんだよ！？」

後部座席には剛だけではなく、山田、藤原も乗っていた。

「拉致られた」

山田が詐欺師に指を差し、小声で状況を説明する。

一方、犯罪まがいな事をした詐欺師は笑顔で口笛を吹いている。

本当に何がしたいんだ？この男。

バンが大通りを出て15分後、ある所に到着した。
そこは街で一番でかい総合病院だった。

「行くぞ」

詐欺師が車を降りて、俺達を誘導する。仕方なく詐欺師についていく。

何回か逃亡を計ろうとしたが、その度に詐欺師が笑顔で「無駄だよ」と呟いたから怖かった。

七階のある病室に着くと、詐欺師はノックをしてゆっくり引き戸を開けた。

そこには、ベッドで横たわってる若林先生がいた。

第五話『判決』（前書き）

ここでやっと物語が始まります。

第五話『判決』

「先生……」

「よう、みんな揃ってどうしたんだよ」

先生はいつもの笑顔で俺らを迎えてくれた。

何も知らない子供のような笑顔に、俺は胸を締め付けられるような思いだった。

「まあ座れよ。椅子四つも無いけど」

「ああ、いいっすよ。俺ら立ってます」

俺達は遠慮して立ったが、詐欺師は一人で当たり前かのように座り始めた。

何なんだ、こいつ。

「で、どうしたんだよ、いきなりやってきて」

若林先生が嬉しそうに聞く。生徒が見舞いに来てくれたのがそんなに嬉しいのかな。

……俺の中で天使と悪魔が喧嘩している。

「今がチャンスだよ、謝りなつて。今なら先生も許してくれるかもしれないよ」

天使が俺を説得する。

「ほっとけばいいんだよ、死んでなんかいないんだ。五年ぐらいで時効になるだろ」

悪魔が俺にアドバイスをしている。

おい、天使。もし犯人が俺じゃなかったらどうするんだよ。
おい、悪魔。もし犯人が俺だったらどうするんだよ。
だけど、俺ができることはこれしかない気がするんだ。

許してくれ、悪魔。

「先生」

「んっ？」

「話、聞いてくれませんか？」

病室に重い空気が纏わりつく。

俺はゆっくりと正座の形になり、土下座を始めた。
額が床に当たるぐらい頭を下げた。

「あの日、先生を轢いたのは俺です！しかもそのまま逃げました！
先生の全てを無くしました！本当にすみませんでした」

「拓真……」

「本当にすみませんでした！」

気付けば、目から涙が溢れ、床を濡らしていた。

子供の頃から、俺は泣かなかった。

転んで膝を擦りむいても、兄貴に頭を叩かれても、自転車に上手く乗れなくても、泣かなかった。

『全米が泣いた！』と騒がせてる映画を見ても、泣いたりはしなかった。

そんな俺が物心がついてから初めて泣いた。
先生も友達もよく分からん詐欺師もいるなか、ボロボロ涙を流している。

心の中に貯めていた色んな物が、涙へと化したかのようだ。

「……」

先生は無言のまま、俺を見つめている。

構わない、殴られたって、捕まったって、どうだっていい。

「すみませんでした！」

えっ？

気付けば山田も藤原も剛も土下座している。

「関係ねえだ」

「逃げようと催促したのも、前を見ろって注意をしなかったのも俺らです！俺らも共犯です！」

「俺らは何でもします。覚悟も出来てます！ただ、拓真だけのせいじゃないんです！」

「それだけでも覚えていてください！お願いします！」

俺は、なんて最高の親友を持てたのだろう。

何があっても、こいつらは俺の傍にいてくれた。

こんなくずみたいな俺を、かばってくれている。

俺にはもったいねえぐらいだ。

「お願いします！」

三人が必死に頭を下げている。

俺も頭を下げた。

暫く、無音の空気が病室を包む。

「成功だな」

そんな空気を詐欺師が壊すかのように口を開いた。

は？成功？

「そうですね」

若林先生が詐欺師に敬語で応える。

「どうゆうことですか？」

「うん、知ってたよ。お前らが轢いたって」

何だって！？

「轢かれた時、まだ意識あったんだよ。んでお前らの声も聞こえてさ。逃げた時はムカついたけどな」

終わったな。

ああ。

俺らは心の中で会話をした。

暗い暗い牢屋の生活が俺らを待っている。

「別に大丈夫だよ、俺の不注意でもあったし。警察に被害届けを出す気にもならねえ。気にすんな」

先生は純粹な笑顔で俺らに言った。その笑顔はあまりに純粹すぎて輝いて見えた。

「せ、先生…俺…すいませんでした！」

俺はサツと立ち上がり、頭を下げた。

あの時も泣いていたのかもしれない。頬に何かが通ったような感触があった。

「だけどな」

先生は真剣な顔になって、俺らの顔を見渡した。

「俺らはデビューしたかった。教師を続けながらバンドをやりたいかった」

だが、それを奪ってしまった。その罪はあまりに重すぎた。

「判決を言う」

判決とは…。俺らは顔を見合わせ、覚悟を決め、先生の判決を待つ。

「俺らの代わりにバンドを組んで、デビューしろ。それが判決だ」

ええええええええ！？

中学生の時、俺と藤原はバンドを組んだ事がある。本気でモテるだけを目指に頑張っていた。

「俺！！ボーカル！ボーカル！」

「ドラムって楽じゃね！」

「何このギター？弦少なくなね！？」

「それベースだろ！！」

「また千切れたあああ」

「うわああああん！！」

もう何もかもわからないから地元でライブハウスでライブを見てみた。

解散した。

「バンドなんてできねーよ…」

「いや、捕まるよりはマシだろ」

「捕まえる気なんかねえよ！」

先生はこう言うものの、無理に決まってる。ましてやデビューなんて、10回連続サイコロの出目を当てるぐらい難しい。藤原なんてベースとギターの区別もわからなかったし。

「言っておくが拒否はさせねえぞ。俺はもうやる気満々だ」

詐欺師は腕を組み言った。

「何を言ってるん」

「やるとしても入れる気ねえし」

「なっ。お前もだろ？藤原」

藤原に同意の声は聞こえなかった。

藤原は詐欺師の顔を色んな方面からジロジロ眺めている。気持ちは悪いな、そっちの気があるのか？

「あー！ー！ー！ー！」藤原が急に叫んだ。

「なんなんだよ！詐欺師の顔を見たり、いきなり叫んだり…」

「ちっ、ちがつ…おえ…この人…」

「落ちて着け落ちて着け。まずトイレ行け」

「平気。それよりこの人」

「ん？詐欺師がどうした」

「詐欺師じゃねえよ！この人はドリーム・ユーのギタリストで、全楽曲を作った伝説のバンドマン。川崎ユウヤだよ！」

なっ、こいつがドリーム・ユーの…。

「やっと気付いたか、おせーよ」

川崎が呆れた顔で言う。頭をボリボリ掻いて、照れている。

「全楽曲ってことは…」

「ペペロンチーノが世界を制するも？」

「ダセー！！」

その後、俺と剛と山田の三人は藤原にボコボコにされ、危うく病院で病院送りされそうだった。上手い事は言っていない。

俺らはメンバーに川崎ユウヤを加え、五人でバンドを組む事になった。

第五話『判決』（後書き）

いよいよバンド小説の始まりです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2112d/>

空に歌えば

2010年12月10日17時25分発行